

言語とジェンダー研究

宇佐美まゆみ (うさみ まゆみ)



まず、一九七二年に創刊された『言語』が、今年で創刊満三〇周年を迎えたことに、心からお祝い申し上げたい。企画の趣旨にも記されていたように、日本でも「言語学」が注目されるようになり始めた時代に創刊された本誌は、以後三〇年にわたってこの国の言語研究の進展と歩みをともしてきたと言っても過言ではないだろう。そして、この歩みはまた、日本の言語研究が、輸入学問からオリジナルな内容を持つ学問として地歩を固めてきた歴史でもあると言う。新たな世紀が始まったばかりであり、また本誌が三〇周年を迎えたこの機会に、これまでの日本の言語研究の歩みを振り返り、

今世紀の言語研究のさらなる発展を展望することは、大変意義のあることだと考える。

ただし、このような節目にあるときだからこそ、また、これからの日本の言語研究の発展を切に望むからこそ、「日本の言語研究が、輸入学問でもなく、また、鎖国学問でもない、真にオリジナルな学問として、その内容を充実させ、成果を蓄積し、そして、その成果を世界に発信してきたか」ということについては、筆者は、厳しい目で捉えているということも、あえて記しておきたい。しかし、これまでの歩みの具体的な内容とその成果は、領域によっても異なるであろう

における「言語とジェンダー研究」のこれまでの歩みを振り返るとともに、この領域の研究の今世紀のさらなる発展に向けて、「日本語とジェンダー」にかかわる研究が、世界の言語研究にいかに関与しているのか、また、しなければならぬのかという観点から、展望を示したい。

言語学におけるジェンダー研究

「言語とジェンダー」の問題が、言語学の中で取り上げられる発端となったのは、アメリカの言語学者、ロビン・レイコフ (Robin Lakoff) が、「Language and Woman's Place」という論文を、*Language in Society* に発表した一九七三年である。本誌『言語』が創刊された翌年である。レイコフは、この論文の中で、英語表現のうち女性を指す数々のことばが、いかに女性無視、女性蔑視に基づいているかを指摘した。また、「女らしいことば」の特徴を、「無意味な会話を、丁寧に、媚びるように、感情的に、

そして、差し障りのないように話す」とまとめ、女ことばを男性中心主義のアメリカ社会における弱者の言語であると位置づけた。そして、女ことばを研究することによって、性差別主義にメスを入れていく必要があると主張したのである。

このレイコフの研究は、初めて「ことばとジェンダー」を扱った研究として、また、数々の鋭い指摘を含んでいるものとして一躍注目を浴びた一方で、後に、フェミニストたちから厳しく批判されることにもなった。それは、仮に、女性がレイコフの言うように話す傾向にあったとしても、その問題の本質は、社会規範や教育のプレッシャーが女性にそれを強いているという側面にこそあり、問題は女性の側ではなく、社会のほうにあると考えられたからである。レイコフの指摘は、犠牲者である女性に、さらに責任を押しつけて非難する形になっているとして激しく批判されたのである。確かに、レイコフの指摘の具体的内容

うし、それが、まさに本号の各々の領域の概観の中で、おのずと示されるのであるから、ここでは、細かくは触れない。筆者が今回依頼を受けた「日本の言語とジェンダー研究」は、以下の四つの問題・視点から考えることができる。いずれも、世界的視点から見た「学問の独自性と相互交流」という問題にもかかわるものであり、言語研究のみならず、多くの分野、特に、人文・社会科学に共通する問題を考える際にも通じる視点である。

- ① 世界に共通した問題としての、いわゆる「言語学」における「ジェンダー研究」の位置づけの問題
- ② 日本における独自の研究とその成果の世界への発信にかかわる問題
- ③ 欧米の研究・視点の日本の研究への影響の問題
- ④ 広い意味でのフェミニズム研究における「言語研究」の位置づけとその役割の問題

本稿では、上記四つの観点から、日本

自体には、様々な問題点もあり、その後のより実証的な研究によって反証されたものもある。しかし、先の①にあげた「言語学」における「ジェンダー研究」の位置づけの問題という観点から言うところ、レイコフが、言語学に初めて「ジェンダー」という視点を持ち込んだ功績は計り知れず、その指摘は、本来的には、「言語とジェンダー」が内包する問題の核心をついていたと筆者は捉えている。

日本における言語とジェンダーにかかわる研究

一方、日本における「言語と性」にかかわる研究は、視点としては、現代的な「ジェンダー」、すなわち、「性役割が社会的文化的に学習・形成されるものである」とするフェミニズムの視点とは全く無縁の形で、欧米よりはるかに前から研究の対象にはなっていた。ちなみに、『言語生活』(筑摩書房)という雑誌では、一九五一年の創刊一号から一九八八

て扱われている程度であった。同時に、欧米の研究やジェンダーという「視点」を紹介し、研究者や一般の興味を喚起した功績は大きい。但し、その後、十数年を経て、井出は、フェミニズム思想とは相容れない女性語の捉え方（「ことば」「五号」「六号」）へと変容を見せている。

レイコフ以降、欧米では、言語とジェンダーの問題は、フェミニズム運動と切り離せないものとして相互に発展していく。そこでは、言語とジェンダーの問題は、個別言語の細かい特徴の違いを超えてある共通した問題として理論化されていく。そうした動きに敏感に呼応する形で「言語とジェンダー」の問題を考え、欧米の言語とジェンダー研究に強い影響を与えたレイコフやスペンダーの著作を日本語に翻訳するとともに、自らも「おんなと日本語」（有信堂、「五号」）を編むなどして、常に、欧米と日本の橋渡しの役割を果たしてきたのが、ハワイ大学のれいのるず・秋葉かつえである。

日本独自の研究と欧米での体系化されつつある言語とジェンダー研究の有機的統合を企図すべく、一九九二年、遠藤織枝・れいのるず・秋葉かつえ・井出祥子が発起人となって発足した『夢科夏のワークショップ』（活動の中心は、現代日本語研究会）は、二〇〇一年で一〇回目を迎えた。その地道な活動と継続は大いに評価される。しかし、これらの活動を通して、「欧米の研究動向の紹介」的なものと、逆に、「国語学」的な視点に留まった研究各々の方法論や主張には、微妙な隔たりやずれがあることは否めず、そのため、日本語の女性語を題材としながらも、世界に共通する「ジェンダー」という視点で問題を切り、それを理論化して世界に発信していくというところまでは発展しきれてこなかったというのが現状だと言わざるを得ない。しかし、日本の言語研究の世界への発信・貢献という観点から、今後の発展が最も期待できる領域の一つが、この日本語独自

の極度に言語形式化された女性語が内包する問題の研究であると筆者は考えている。

一方、欧米のフェミニズム理論に強く影響を受けながら「ことばとジェンダー」の問題に取り組んできたのが、中村桃子である。中村は、「ことばとジェンダー」（二〇〇一、勁草書房）のあとがきの中で、「言語とジェンダー研究が『フェミニズム言語学』と名付けられ、『男女の言語行動のすべてを支配関係に還元する分野』だと誤って批判されていたのを目にしたのがきっかけで、そのような『誤解』を解消すべく、この本をまとめた」と述べている。中村は、ここ十数年来、欧米のフェミニズム言語理論の日本への紹介者の役割を担ってきた感が強いが、この本の中で、初めて、先に述べた寿岳や遠藤らの日本語の研究に言及しながら、「日本語自体」の問題への興味を示し、「英語研究の枠組みに基づく日本語研究」と、「日本語学の中から独自

且つ、地道に発展してきた日本語研究」との相互交流の必要性を説いている。

「メディアの中の性差別を考える会」によるメディアにおける女性表現の研究にも言及しておかなければならない。日本語の表現を扱っているが、メディアが「ジェンダー・イデオロギー」の形成に果たす役割を重要視、問題視する発想は、やはり欧米のフェミニズム思想の枠組みに影響を受けたものと位置づけられる。

●広い意味でのフェミニズム研究における「言語研究」の位置づけと役割

最初に述べた③欧米の研究・視点の日本の研究への影響の問題、という観点から見ると、概して、英語研究、言語学、社会学、メディア論などは、よくも悪くも、欧米のフェミニズム研究の動向を敏感に反映している。一方、「日本語」におけるジェンダー研究は、フェミニズム的発想と合い通じるものを内包しながらも、これまた、よくも悪くも、欧米主導

で発展してきたフェミニズム理論とは、実質的な交流なく発展してきた。先に述べたように、それだからこそ、かえって、日本語の研究によって明らかになった様々な知見は、これからの「世界の言語とジェンダー研究」に貢献する余地が十二分にあると言える。最初に、④としてあげた、広い意味でのフェミニズム研究における「言語研究」の位置づけとその役割の問題については、人間のアイデンティティそのものであるにもかかわらず、フェミニズム研究における「言語」にまつわる問題の研究の重要性は、未だ過小評価されている感がある。日本におけるフェミニズム研究においては、さらにその傾向が強い。フェミニズムには興味があるが、「女ことば」の問題には、関心がないという具合にある。

しかし、言語それ自体がいかに「ジェンダー」の形成に影響を与えているかという根本的問題を、豊富な事例に基づいて世界に提示することによって、世界の

言語研究のみならず、フェミニズム研究のさらなる発展にも貢献できるのは、また、貢献しなければならぬのは、「日本語の言語とジェンダー研究」であると筆者は考えている。その発信への準備が、この二〇数年の間に着実に進められてきた。その歩みが速かったか遅かったかは、今問うても無意味であろう。その答えは、今後成果がいつ表れてくるかで計ることができるからである。

【引用文献】

- Lakoff, R. (1973) "Language and Women's Place" *Language in Society*, 2, 45-80. (二〇〇五年に同名で Harper and Row から単行本として出版される。邦訳「言語と性」かつえ・あきば・れいのるず訳、一九九二年、有信堂)
- 鈴木睦（一九九一）「いわゆる女性語における女性像」『神戸大学「近代」発行会「第2号」』、二二頁
- 宇佐美まゆみ編著（一九九七）『言葉は社会を変えられる』明石書店

（東京外国語大学外国語学部／

言語社会心理学・日本語教育学）